『スザンナ』における
ゲルトルート・コルマーの自己理解について

関　口　なほ子

はじめに

物語『スザンナ』は1939年12月29日から1940年2月13日にかけて執筆されたユダヤ系ドイツ女性詩人ゲルトルート・コルマー（Gertrud Kolmar,1894-1943）による最後の作品である。1938年秋にベルリンのフィンケンクルーク（Finkenkrug）にある緑豊かなコルマーの家はナチにより強制売買にかけられ，翌年1月21日に彼女は父ルートヴィヒ（Ludwig Chodziesner,1861-1943）とともにシェーネベルクのシュパイアー通りにある，ユダヤ人共同家屋（Judenhaus）への転居を余儀なくされる。[1)]

「書く」ことはコルマーにとってなお一層，根なし草のような宙づり状態（Luftleben）[2)]の中で，自身の拠り所を「無意識的に」追い求める手立ての一つとなる。「我が家」[3)]とは到底感じられない住居の手狭な一室で，1942年にアウシュヴィッツ強制収容所へ連行されるまで，強制労働（1941年7月から）の合間を縫って，彼女は創作を続けている。[4)]

物語『スザンナ』は精神的な障害をもつ東方ユダヤ人スザンナの養育係となった西方ユダヤ人の語り手「私」による，彼女との短い生活の記述である。そこではスザンナの「詩人」のような資質と臆することなく「人を愛する」姿勢が目を引く。

コルマーの伝記によれば彼女には，1919年以降数年に渡る，外国人に対するドイツ語教師としての経歴や，[5)]わずか14日間ではあるが，2人の聾唖の子供の家庭教師としての体験がある。[6)]さらに執筆時期を考慮すると，次章で取り上げるコルマー自身の恋愛が少なからず『スザンナ』に影響していると思われる。本稿では『スザンナ』という登場人物の考察を通して，コルマーにとって『スザンナ』が持つ意味と位置価値を検討する。

1 「愛」：コルマーの場合

1930年インゼル年鑑（Insel-Almanach）[7] に掲載されたコルマーの2編の詩，ツィクルス『女の肖像』（Weibliches Bildnis,1932. 1938出版）所収の「さらわれた女」（Die Entführte）と「曲芸師」（Die Gauklerin）[8] によって高く評価されたコルマーは，ドイツ人作家イナ・ザイデル（Ina Seidel,1885-1974）やエリーザベト・ラングゲッサー（Elisabeth Langgässer, 1899-1950）と知り合い，知遇を得ることになる。[9]

28歳の詩人・化学者のカール・ヨーゼフ・ケラー（Karl Josef Keller, 1902-1989）も，コルマーの詩に注目し賞賛の手紙を書いた一人である。1930年代半ばにコルマーと出会ったケラーは，1939年彼女が45歳になるまでおもに文通や詩の交換を介して彼女と親睦を深めている。コルマーからみれば詩作の原動力となり，自作の詩を捧げるほどの熱烈な愛の対象となったケラーとの関係は，前触れもなく発覚した彼の結婚（1937年）によって破綻する。[10]

1934年11月または12月の二人の北ドイツ（ハンブルク・リューベック・トラヴァミュンデ）への短い旅は，ケラーへの「満たされない愛の記録」[11] とされる詩「7つの詩へレン・ロジャースの〈ドイツの海〉から」（Siebengedichte aus „German Sea“ von Helen Lodgers）[12] に結実し，コルマーにとって「最も美しい」記憶として留められている。[13] これに反してケラーは，彼女との旅によって，手紙や詩から思い描いていた彼女のイメージが，実像と一致せず落胆したことや，結婚後ユダヤ人との交際が発覚することへの不安をコルマー宛の書簡に書いたこともあったと，コルマー亡き後，ヨハンナ・ヴォルトマン（Johanna Woltmann）へ証言している。[14] 当初からケラーへの愛を告白していたコルマーに悪い気はしなかったものの，その一途な態度に圧倒され，彼女を落胆させないように配慮しつつ，ナチズムのような狂心的な愛国精神と距離を置こうとしていたドイツ人男性にとって，ユダヤ人との親密な交際が密告されることへの恐れ[15] は十分考えられることである。1939年クリスマスにコルマーはただ一度，ルートヴィヒスハーフェン（Ludwigshafen）のケラーを訪問し，これが二人にとって最後の別れとなっている。[16]

2　スザンナというユダヤ人女性

『スザンナ』の語り手「私」は当時，ノルトライン・ヴェストファーレン州のメルス（Mörs）に居住し，アメリカへの亡命許可[17]を待っている一人のユダヤ人女性である。『スザンナ』は新聞でかつての知人の死を知った「私」が（7），そこから浮かび上る記憶を時系列的に語り，最後に語りの現在に戻ってくるという枠構造を備えた物語となっている。「語り手」の記憶の中心に登場するのが「孤児」のユダヤ人女性スザンナである。彼女の世話と養育の仕事を得て，ドイツ西部から東部へ赴いた（8）「私」は，作品の冒頭で語りのスタンスを意図的に明言する：「私は詩人ではない」。

例えば1933年の詩「ユダヤの女」(Die Jüdin)では，「私はひとかどの詩人，そう，そのことはわかっている」と表明されている。[18]そのうえ詩的自我の心境を明確化するために「塔」のメタファーを用いて，「石のような灰色の帽子」を被った「塔」の帯を身に着け，「雲に突き出る」ことを「私」は望んでいる。天に到達するほどの「バベルの塔」が「高慢」，「限度のなさのシンボル」とみなされるように，天に聳える塔は上界への志向や指標，結びつきを表すものである。[19]実現の可能性を問わず，「ユダヤの女」の社会的かつ実存的な抑圧を，複数の言語の武装によって跳ね返そうとする心性が浮き彫りにされている。

この例とは異なり，「私は詩人ではない」という前掲の発言は，老いてやつれた風貌の「家庭教師」である「私」には，「詩人」や「芸術家」のような「美しい物語」の創作はできないという断り書きである。これはこれから記される出来事が語り手の記憶の再生であり，恣意的な美の創造を目指すものではないというコルマーの宣言のようにもみえる。[20]

たしかにスザンナは創作上の主人公であるが，ときに「狂人」のように振る舞う自閉症患者である。20歳のスザンナの人物像について，後見人である法律顧問官は，彼女は「大人」の苦労とは無縁な「快活な心優しい子供」にすぎず（9），「孤児は人間の友を必要としない」（23）という。というのは彼女自身が「つきあい」（社交）を望まず，「孤独とは何かを知らない」（10）からである。「女友達」は彼女を退屈させ，彼女の振る舞いは逆に彼らには奇異に映り，スザンナには「女友達」ができないのである（9f.）。

「最も奇妙なことに」「男たちは彼女に挨拶」する（21）。なかには称え

るように，あるいは厚かましい視線を向けて，わずかに真摯な態度で，または同情を湛えて。つまり世間の男はスザンナの風貌から，良くも悪くも注目に値する印象を彼女に抱いている。その反面「女たち」はただ好奇の目で，嘲笑や拒絶の表情を浮かべて，スザンナを無視する。同性からの反感は，多少なりとも異性の気を引く魅力をもつユダヤ人女性への反発に起因するとも考えられる。この「狂人」（スザンナ）に家庭教師という「監視人」がつけられたことは，何かしらの「悪さ」をしたことへの「正当な罰」として「よいこと」である（21）という穿った見方さえなされているからである。さらにすでに他界している，スザンナの両親は，彼女に「結婚は許されていない」（10）と考えていた。

世間の表面的な印象とは異なり，実際にスザンナと対面し，のちに生活を共にする「私」の最初の感覚的な記憶として挙げられているものは，彼女の「明澄で」「鳴り響く」声，「赤い着物」をまとった彼女の「魅惑的な」，「甘さ」と「優美さ」を備えた容姿である:「すばらしい顔立ち」，「美しさ」，「象牙の色調」の「繊細な肌」，「細い鼻筋」，「丸い顔」，「黒髪」，「深い青色の瞳」（11）。

この感覚的な記憶はスザンナの容姿だけにとどまらない。彼女の一見奇妙な，脈絡を欠く発言は独特である。「ダイアモンドの翼とサファイアの目をした，私の虫（＊宝石：論者の補足）を見せてあげる」と初対面の人に提案する幼子のような無邪気さや「ルビー」という「私」の返答を受けて「なんてすてきな言葉:ルビー(Rubin)。そう…暗い(dunkel)…灼熱(Glut)…」(13)というスザンナの発語からは，密かに躍動する息づきの音とイメージの膨らみが感じられる。

スザンナにとって言葉は触覚や嗅覚に訴えるものであり，彼女はそれを「手」に取り，「におい」を敏感に感じ取ることができる（13）。「芸術家」や「詩人」のように，自由な発想で五感に触発されるものから「言葉」を創造し，外界の事象を直観でとらえ心情を思いのままに表現する。その中には音のつながりや連鎖から生まれた，脈絡のない単語の羅列もあり，そのような奇抜な発想は「私」には現実感覚の欠落と感じられるほどである。

あるいはスザンナの発想は，愛犬のボルゾイの名「ゾーエ」（Zoe）から今は亡きビザンツ(東ローマ)帝国マケドニア朝の女帝ゾエを結び付け，「ビザンツの皇帝はトカゲと結婚した」という逸話から，「人間と犬が結婚で

きた」(14) という異類婚姻譚に発展することもある。これは，現実世界ではもはや存在しない異類婚を引き合いに出して，スザンナの偏見のなさや結婚が許されないといわれる彼女の個人的な状況のみならず，人種間の差別意識が先鋭化した社会状況をコルマーが示唆しているようにみえる。

スザンナの自己認識や自意識では，彼女は「動物」(19) であり，「ユダヤ人」ゆえに「ダビデ王」または「サウル王の娘」である (20)。この発言が高貴なユダヤ人女性という矜持から，自己のアイデンティティの源をサウルに求める心情に由来するのか，スザンナがユダヤ教についてどこまで理解しているのかは不明である。語り手である「私」自身は「自分の信仰」であるはずの「ユダヤ教」や「ユダヤ性」を知らなかった (15) と注釈されている。それに対して「ユダヤ人女性」であることは社会的な事実であれ，単純な命題として，少なくともスザンナにおいては自己意識と合致したものと感覚的に捉えられている。

このように「私」が対面したスザンナは世間の噂，固定観念やイメージから逃れる人物である。近づくにつれて想像とは異なる反応を示し，いわば玉虫色に変化するような存在として描かれる。これはのちに語られる彼女の恋愛においても指摘されうることである。スザンナはときに正常な精神状態を維持できず混乱をきたす。そのような時の彼女は現実と空想の境を飛び越えてしまう。そのため周囲の誤解や無理解，スザンナの内界と外界との対立がうまれる。いかにスザンナの精神状態を把握するか，物語の仮想世界の中で，芸術家ではない人間が芸術家（気質）の他者を理解するか，様々な問題が「私・語り手」の現実への眼差しを通じて問われていくことになる。

精神的な障害をもつスザンナも，亡命許可を待つ身の「私」も，人種的なカテゴリーでは同じ「ユダヤ人女性」である。西方，東方といった出自の違いによる階級格差があるとしても，ともに異質な存在 (die Fremde) である。誰にも当てはまるであろう個々人の「異質さ」に対して，コルマーはここで語り手である「私」を通して，スザンナのもう一つの顔を見ることになる。いうなればそれは，〈別の女〉(die Andere) としてのスザンナとの対峙である。その〈別の女〉とは「私」そしてコルマーにとって何者なのであろうか。

3　スザンナの愛における異質さ

コルマーは『スザンナ』のテーマの一つに，「ある男」へのスザンナの愛を取り上げている。「私・語り手」は「ある夜」，スザンナが「見知らぬ男」，ルビーン（Rubin）と「格子越し」にあっているのを目撃することによって，偶然二人の関係を知る。「二人の愛」について語り手は当時も現在も「人間が純粋な愛と呼べるもの」とは明らかに異なっていた（32）と回想し，記憶の確実性を保証する。

「純粋な愛」という表現の意味は，この時点ではまだ判然としない。それは「格子」という障壁を挟み，「白い少女」（33），「月」，「庭園にいる男」によって占められた光景が，観察者である「私」にはまるで書物の中の出来事のように「非現実的」にみえ，困惑に阻まれて，事態の謎を究明できずにいるためである。だが逢引きの様子が見えてくるにつれて，大胆に思いを伝えるスザンナに対して「私」は異様さを，ルビーンもまたしだいに「恐れ」を抱く様子が描写されている。このことから二人の間柄が，正確にはスザンナの愛が単にプラトニックなものではないと推察される。

例えば「私」が病床のスザンナに旧約聖書の「ソロモンの判決」（35）（列王記 I-3）を朗読した際に，王（ソロモン）のもとへ行く二人の「遊女」（Huren）をあえて「女」（Frauen）と言い換えた時，スザンナは驚いて話を遮り，「遊女」という「言葉が書物から消えることがありうるのか」と詰め寄る（36）。この言葉を「知らないと思ったから」という急場を凌ぐ「私」の無難な返答に対して，スザンナは「遊女は愛する女である」（36）と主張する。

「私」が「遊女」という言葉を回避したのは，おそらく教育者の立場から，また社会的風潮の影響から，身体と引き換えに金銭を得る生業や「性」に関する話題への抵抗や躊躇があったためだろう。そのような対処へのスザンナの批判的な指摘は，事象全般に対する彼女の視点の特性を表すものとして注目されねばならない。それは「一つの言葉」（遊女）が書物から消し去られ，「別の言葉」（女）に代替される時に起こりうることへの懸念である。例えば「殺害（による死）」を「死」に置き換える場合，文脈における言葉本来の意味あいや趣も失われ，代替された言葉が抽象的な記号としての機能しかもたない場合すら起こりうる。そのとき「まったく新しい物語（歴史）」や「誰も理解していない文章」が生まれるかもしれない（36）。このような事態や事実（史実）の歪曲や捏造の可能性は，言語そのものの

存立危機に関わる問題である。

「彼女たち（遊女:論者の補足)」は「ただ一人を（原文強調）を愛する」のではなく「多くを愛し」，その対価として金品を得ているという「私」の反論に対して,「愛する人から一つの贈り物もされてはいけないの，チョコレートでも？」とスザンナは問う（36)。彼女の「愛」に計算や打算という概念はない。「愛するなら,すべてを受け取ることが許されている」が,何かを「得るためだけに愛を偽装してはいけない。それをするのが彼女たち」であり（36),「本当に愛していない人は幸せではない」(37)。この「私」の説明には，思案の末に「自分は遊女ではない」(37）と断言するスザンナは,「本当の愛」と「幸福」を手にしていると確信している。では，その「愛」をルビーンはどのように感じているのであろうか。

4 「その男」：ルビーン

「私」が偶然目撃した，想定を超えたスザンナと「男」の深夜の密会は,現実と夢遊のはざまの不可思議な現象として，しかも現実主義的な「私」には「恐怖」を感じさせるに十分な出来事として記述されている（28)。

「彼女は何をしていた？彼女は夢うつつの状態で,部屋を通り抜けていった ... 彼女は目覚め，生気を失い，あの海の王を探していた，彼女の亡霊を ... 狂気の女を前にした戦慄が，夜中に私の背中を走った，それは嘲笑うような不安だった」(28)。

このような描写の合間に挿入される「一人の男の囁き」と「スザンナの声」から，近接する性愛の濃淡が漏れ聞こえてくる。「獣のように息づいていた」「彼女の黒髪」,「銀色の月光」で「ほのかに輝いた白い真珠色の絹の長い裳裾」から覗く「素足」で立ち，震え，微笑し，誘う（29）女がスザンナである。「肉体への物怖じ」を感じつつ,「魂」で男に触れる「一人の女」と「震える灼熱」と化した「その男」(33)。

スザンナにとってルビーン（Rubin）は「人間の名」ではなく「私の貴石」(44）といわれるほど稀有な，愛の「対象」とされている。この思い込みを諌められると，彼女は取り乱し泣き出す（45）という具合に，情緒が過度に不安定になる。このように感情の発露に従い，いわば今という瞬間を動物のように本能的に生きるスザンナは，幼少期のコルマー[21]とは真逆のタイプである。そのため,「私」が彼女に規範やルールを教えても，彼

女から理性的な判断を得られるとはかぎらない。

「彼女は私には異質なままだった，魔法にかけられた，踏み越えることのできない圏域に生きていた。彼女は私の所へ時々やってきたが，私からは一度もそこへ入れなかった」(48)。

「私」とスザンナを隔てる境界は，大都市出身のルビーンとスザンナの関係においても障壁となってゆく。もともと東方ユダヤ人である，精神薄弱のスザンナに対して，侮蔑的な発言が目立つルビーンの母親は，息子とスザンナの付き合いを認めていない。ルビーンもまた「彼女とは遊びではなかった」と「私」に打ち明けながら，ベルリンへの逃亡を企図し，スザンナと別れるつもりでいる（50)。彼が「生垣」でみた「白い少女」に惹かれたのは，「月光」に包まれたその「魅惑的な」容姿と「奇異な」雰囲気を醸し出す正体不明な「異質さ」ゆえである。それが彼の「血」(Blut）の中で「火花」(der Funke）(50）となって燃え続ける「奇跡」(ein Wunder）(51）を起こしたのである。

このように物語の中で一貫して強調されているスザンナの「異質さ」には，ロマン主義や幻想文学にみられる女性の致命的な，邪気のない妖力や世紀末の「運命の女」の聖俗混交のイメージが投影され，生身の女に幻惑される男にとっての都合のいい神話化がなされていると思われる。あるいは，同族意識の高揚や異性の根源的な諸力を危惧する「血」という常套語から，人種主義的偏重への示唆を排除することもできない。その影響を受けているのはスザンナだけでなく，亡命しなくてはならないルビーンにおいても同様である。スザンナとルビーンはそれぞれ „u“ の響きを持つ単語（dunkel, Glut, Blut, Funke, Wunder）で互いを表現しているように，共感覚による結びつきが暗示されているようにみえる。

ルビーンとの「愛」がスザンナの豊かな空想力の源となり，内界と外界を結び付け，それによってユダヤ人女性の社会的な自己実現が期待されるところであるが，愛の対象の不在（逃亡）に抗してスザンナはあらたな選択をするのである。

5　スザンナ：もう一人のコルマー

スザンナとルビーンとの密会の場面は，観察者としての「私」，スザンナ，ルビーンの視点の交差の中で綴られる。そこでとくに目を引くのが「私」

による内的告白である：「私は一度も愛したことがなかった」，「私は一度も愛されなかった」(42)。

この悲痛な叫びのような突発的な独白は，語り手の本音であるばかりか，詩人コルマーの心情であるかのように聞こえる。ルビーンはK.J. ケラーに近い存在といわれる[22]ように，コルマーはスザンナの不実な恋の相手にケラーを重ね合わせていたのではないか。ケラーの結婚を知らずにいた1937年の詩「あこがれ」(Sehnsucht) には「あなたをいつも思っている」という詩的自我の熱情が吐露されている。「縺れあい，永遠の海の中で溺れた夜！」「私の手があなたの胸の産毛の中に休らいまどろんだ時，私たちの呼吸が混ざり合い美酒になった時」。[23] この詩自体は母と息子の関係を歌っているが，スザンナとルビーンの妖艶な密会の描写に類似している。

ほかにも「K.J. のために」書かれた詩[24]や「K.J. に宛てて」という副題が付された詩「捨てられた女」(Die Verlassene)[25]がある。「K.J.」を思って書かれた詩「愛」(Liebe) では，「K.J.」は捧げものを献上される王の位置に置かれる：「あなたに私は仕えたい，私の栄誉であり主に，/ あなたに供物を捧げたい，ワインと甘いパンを」。[26]

コルマーはケラーとの交際を詩のモチーフにして，神話的な世界の登場人物になぞらえて彼を描くこともあり，そのために彼にはコルマーが「神話」の中にいる女性のように思われていたという。[27] またコルマーが幼少期から身につけていた，「奉仕」や「献身」という恭順な性質を差し引いても，これらの詩には愛する女のひたむきな思いがにじみ出ている。

1927-37年の詩「詩人」(Die Dichterin)[28]の詩的自我は，「あなた」と呼びかける「一人の人間」によって読まれる作品そのものとみなされている。「その両手で」抱きとられ，「拳」[29]の強さ次第では壊されかねない詩的自我の「心臓」は「小鳥のように脈打つ」(V1-2)。「これを読むあなたは気を付けて / だってあなたは一人の人間を紐解いているのだから」(V3-4)。

コルマーは愛する一人の人に自らの真意を理解されることはなかった。その点で，彼女はスザンナと重なり合う。ケラーとの愛の挫折，コルマーの果たせなかった愛のありようを彼女は『スザンナ』を通して描き返したのではないか。コルマーの場合，ケラーに傾けていた愛情が一方通行であり，愛の対象を「神話的な形姿」として，理想的な存在に置き換えること

はできても，パートナーとして共に歩み，時熟する時を育むような人生を獲得することはなかった。

語り手である「私」も「詩人」ではなく，実人生における恋愛の経験はないといわれていた。「詩人」に近い，または「詩人」のような資質を持つスザンナにおいても，彼女の独我的な想像によって創られていた内的世界は，ルビーンとの関係の破綻とともに社会生活を営み，外界との結びつきを広げていくすべを失うことになる。だが，唯一スザンナだけが「私」の注意をかいくぐり，独りルビーンを追いかけ，家を出ていく点が「私」やコルマーとの違いである。駅員に言われた冗談を真に受けて，線路を辿ればルビーンのいる目的地ベルリンに到達すると信じて，線路を歩き続けるスザンナの歩みに終着はない。彼女の末路はメディアが伝える無名の「精神錯乱者」による「自殺」の記事に暗示されるだけである（64）。

類例として，ある男の事故死が新聞を介して日常茶飯事の一つとして伝達され，物語の結末に代えられるという方法は，小説『ユダヤ人の母』(Die jüdische Mutter,1930/31,1965)においても用いられている。そこでは，不明者による女児誘拐・虐待事件や被害者の母（主人公）による子の安楽死の実行，主人公による犯人捜しの挫折，その果ての主人公の自死など，複数の要素が織りなす物語の層の厚みが特徴的である。この作品に比して[30]『スザンナ』の物語性は簡素であり，スザンナの発言，振る舞い，日常生活の様子が「私」の経験をもとに構成され，彼女の自死の場面は直接描かれることはない。

小説『ユダヤ人の母』の自死の描写に神話的な要素が加味されているのに対して，無垢，あるいは無知ゆえの，スザンナの無謀ともいえる出奔とその予見的な終りが「美しい」といえるのかどうかはわからない。だが，スザンナは「自分の身体を自分でコントロール」し，生きることをより豊かにするために「考える想像力を発揮する」[31]力を本能的にもつ，いわば前進する人間とみなされる。彼女の逃走は停滞や固定化されない躍動の中で，実存的選択を成し遂げるものである。それは「自由と自律」に対する主体の基本的な要求に忠実に行動し，新たな可能性を模索することを意味する。

つまりスザンナは社会や政治，共同体に関与することはできないが，共同体への「同化」や「順化」を求めることなく，自力で出奔し，束縛され

ない思考と身体的な自由を確保したと考えられる。但し「本来の意味での*思考*（原文強調）」を「*両性間の対話*（原文強調）」[32] から，あるいは複数間の視点からのみ生まれるものであるとするならば，閉鎖的な生活空間内でのスザンナの思考は恣意的な空想の域を出ない可能性がある。実生活において閉鎖的空間にとめおかれ，自由が制限されていたコルマーの状況から，彼女には不可能な行動や願望の実現をスザンナは託されたとみなされる。

亡命許可を待つ「私」と亡命の機会を逸したコルマー。そして結果を問わず，自由意思で「死」という最期を見出すことになるスザンナは，コルマーにとって第二の自己としての，言葉を換えれば，コルマーの内に潜むもう一人の女（die Andere）である。「他者であること」はコルマーにとって特異な価値をもつ存在として意味付けられている。このような「他者」の自認がコルマーにはあり，「他者」としてのありようがスザンナを通して示されている。

テキスト

Kolmar, Gertrud: Susanna. Frankfurt am Main 1993（1959）.

Dies: Das lyrische Werk, Gedichte 1927-1937. Herausgegeben von Regina Nörtemann. Göttingen 2010.

Dies: Briefe. Herausgegeben von Johanna Woltmann. Durchgesehen von Johanna Egger und Regina Nörtemann. Göttingen 2014.

本文中における „Susanna“ からの引用箇所や補足的に要約して使用した箇所には該当ページ数のみを記した。

注

1）Kolmar, Gertrud: Briefe. Vgl. Brief an ihre Schwester Hilde am 24. 11.1938, am 15. 2. 1939. S.28, S.30.
Marbacher Magazin. Gertrud Kolmar 1894-1943. Bearbeitet von Johanna Woltmann, Marbach am Necker. 63/1993. S.46.

2）Kolmar, Gertrud: Briefe. Brief an Hilde vom 2. 6. 1941. S.111.

3）Ebenda. S.110.

4) 詩的創作はコルマーにとって子供を産む行為に等しいことが記されている。Vgl. Kolmar, Gertrud: Briefe, Brief an Hilde vom 15. 1. 1940. S.60f. 1942年3月5日から4月13日にかけて小さな物語が執筆されたが現物は残されていない。Vgl. Marbacher Magazin, S.110.

5) コルマーはロシア語，フランス語，英語も堪能であり，1914年にフランス語，英語の国家試験に合格している。1927年6月にドイツ外務省の通訳試験に合格後，ディジョン大学（Dijon）の外国人のための語学コースに参加し，優秀な成績でDiplomを取得している。

6) 1914年以後コルマーは幼稚園での職務経験をもつ（Lebenslauf参照）。Vgl. Marbacher Magazin, S.113ff.

7) Insel-Almanach auf das Jahr 1930. Leipzig. S.93-96. Vgl. Heimann, Friederike: Beziehung und Bruch in der Poetik Gertrud Kolmars. Verborgene deutsch-jüdische Diskurse im Gedicht, Berlin 2012. S.66-71. Marbacher Magazin, S.58.

8) Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Gedichte 1927-1937. S.106, S.113f.

9) Marbacher Magazin. S. 64, 65f. Vgl. Brief von Ina Seidel an Peter Wenzel（Kolmars Schwager）vom 4. 6. 1946, Brief von Elisabeth Langgässer an Peter Suhrkamp vom 18. 9. 1947. 後者はズーアカンプがコルマーの詩集『世界』（Welten）を送った返礼の手紙である。

10) この段落については以下を参照。ケラーは当時実験助手として，ルートヴィヒスハーフェンのイー＝ゲー＝ファルベン（IG-Farben）に勤務し，独学で詩を学んだという。Woltmann, Johanna: Gertrud Kolmar. Leben und Werk, Göttingen 2001. S.229, 232.

11) Marbacher Magazin. S.99.

12) Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Gedichte 1933/34. S.477-489.

13) Kolmar, Gertrud: Briefe. Brief an Hilde vom 26. 1. 1943. S.199. Woltmann, Johanna: Gertrud Kolmar. S.233.

14) Woltmann, Johanna: Gertrud Kolmar. S.230.
1948年2月3日コルマーの訃報を受けたケラーからのヒルデ宛書簡によると，彼がコルマーに会ったのは1939年のクリスマスである（S.233）。

15) Ebenda. S.230, 232.

16) Ebenda. S.232.

17) 転居についての話題は 1939 年 2 月 15 日付ヒルデ宛書簡（S.30f.）を参照。なお，コルマーの妹マルゴットと弟ゲオルクは 1939 年にそれぞれ別のルートでオーストラリアへ亡命している。コルマー自身も妹ヒルデの勧めでイギリスへ行くことを思案するも転居に忙殺され，亡命が先送りされることになる（1938 年 11 月 24 日付）（Vgl. Briefe, S.28)。「自分の近い将来」を検討するうえで，彼女が父親との同居を考慮せざるを得なかったことが窺える（1939 年 2 月 15 日付書簡）(Briefe, S.30f.)。3 月 26 日の書簡ではヘルマン・ヘッセの「内面への道」についての言及がなされている。「何かを遂げること（Leistung）が成功よりもはるかに重要だと思う」。「運命が私に何を企んでいるかわからない」として自身の作品の「保管」をコルマーはヒルデに依頼する。自身の行く末を予見しているような文言であると同時に，晩年のコルマーの心境を推察するうえで重要な書簡である（Briefe, S.34.)。

18) Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Weibliches Bildnis. Erster Raum. S.91.

19) Vgl. Lurker, Manfred (Hg.): Wörterbuch der Symbolik, Stuttgart 1991. S.773f.

20) コルマーによる 1938 年の発言に以下のものがある。「エルゼ・ラスカー・シューラー以来の最も重要なユダヤ系女流詩人の一人として評価された時ですら，それは私を大して興奮させなかった（…），今日批評家がいなくても，自分が詩人に値し，自分に何ができ，何ができないかを知っている」。ヴォルトマンはこれをコルマーの「自己への信頼」（Selbstvertrauen）と考察する（Woltmann, Johanna: Gertrud Kolmar. S.17f.)。
コルマー自身の詩作品に対する自信は，詩「ユダヤの女」における詩行「私はひとかどの詩人，そう，そのことはわかっている」や 7 月 27 日付書簡における発言「物書きには決してなりたくない」(Briefe, S.117）に表れている。これらは詩人としての経験値に裏打ちされた現実的な自己分析であるとともに，予見できない将来への複雑な心情を抱懐するものである。不可知な命運には，反ユダヤ政策の激化と悪化に左右されるところが大きく，この状況の不可抗性が意識されていると思われる。その意味においても『スザンナ』は等身大のコルマーの自己省察を探る手がかりになる。

21) Speidel, Hubert: Die Persönlichkeit Gertrud Kolmars aus psychoanalytischer Sicht. S.43-64. In: Ilse Nagelschmidt/Almut Nickel/Jochanan Trilse-Finkelstein: Dichten wider die Zeit. Textkritische Beiträge zu Gertrud Kolmar, Frankfurt am Main 2013.

コルマーの幼児期における母子関係が，彼女の人格形成に影響を与えているという指摘がある。この指摘に関連して，ジョン・ボウルビィ 作田勉監訳：母子関係入門 星和書店 2020（1981）年 62 ～ 64 頁，77 ～ 78 頁にコルマーの事例に当てはまる考究がなされている。それは「早期の母性的養育の喪失」についてであり，ボウルビィによると「母親的養育」の欠如と幼児の「人格発達の障害間」には「因果関係」がある。「人格」における「多くの一般的歪み－非行性格の形成から不安定状態やうつ状態になりやすい人格まで」は，「この種の体験」つまり「生後 6 ヶ月から 6 歳までの乳幼児期における母親的人物の喪失」によって生じると推察されている。「生後半年後から生後 2 年目と 3 年目を通して，子どもは母親に非常な愛着」を示し，生後数年間で「本人の知らぬ間に人格の基礎が形成される」（29 頁）。

とりわけコルマーが乳幼児期において，母子の十分な愛着関係が定着しない状態で，3 歳年下の妹の世話を母エリーゼから委ねられた経験が，コルマーの長女としてのあるべき姿の自覚や内向的な性格を助長したという推測もなされる。母親の死後（1930 年），妹や弟のように直ちに亡命に踏み切らなかったことも，ベルリンを離れたくないという父親の意向に従っただけでなく，コルマーの他者へ奉仕する姿勢や献身的な態度の強さによるところが大きい。ヴォルトマンによるコルマーの伝記においても，「子供時代の孤独」や母親から「突き放された」経験（Verlassenwerden, Verlassenheit）が彼女の人生の中心的な経験であると述べている。Woltmann, Johanna: Gertrud Kolmar. S.50.

22）Woltmann, Johanna: Gertrud Kolmar. S.230.

23）Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Welten. S.506.

24）Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Wappen von Bücken in: Das Preußische Wappenbuch. S.71.

25）Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Weibliches Bildnis. Vierter Raum. S.167f.

26）Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Bilder der Rose. S.343.

27）Woltmann, Johanna: Gertrud Kolmar. S.229.

28）Kolmar, Gertrud: Das lyrische Werk. Weibliches Bildnis. Erster Raum. S.89.

29）「拳」は破壊のシンボルでもある。Vgl. Czvitkovits, Jana : Weiblichkeit in der Lyrik Gertrud Kolmars und Marina Cvetaevas, Saarbrücken 2017. S.72.

30) 小説『ユダヤ人の母』についての詳細は，拙論〈女〉そして〈母〉であること—ゲルトルート・コルマーの小説『ユダヤ人の母』について『人文紀要』第 88 号 2014. 15 ～ 35 頁を参照されたい。

31) ジュリア・クリステヴァ 栗脇永翔 / 中村彩訳：ボーヴォワール 法政大学出版局 2018. 6 頁参考。クリステヴァは「家父長制や男性による支配」からの「〈第二の性〉の解放」を「促進」したボーヴォワールの影響として発展した一連の女性解放運動に言及し，「女性の権利」は「自身の身体」を「考える想像力を発揮する権利」であると指摘する。

32) 同上 8 頁